

指導者養成に関する新しい付加資格について



平成 25 年 6 月 1 日 (土)

N P O 法人 川に学ぶ体験活動協議会

RAC学校連携コーディネーター養成講座(案)

講座名称	時間		座学のカリキュラム内容	OJT(その他)の 対象活動	受講要件	NEALとの 関連
	座学	OJT (実務)				
基礎課程	1.5h	60h以上 (学校活動 8h以上)	<p>学校教育と水辺体験</p> <p>(1)子どもの体験活動に関する教育行政の動き</p> <p>(2)子どもの現状について</p> <p>(3)学習指導要領に示された「生きる力」について</p> <p>(4)「水辺体験」(自然体験)の必要性</p> <p>(5)学校組織について</p> <p>(6)OJTによるスキルアップとその必要性について</p>	<p>(1)下記の講座等を受講する</p> <p>①プロジェクトWETエデュケーター講習</p> <p>②プロジェクトWILDエデュケーター講習</p> <p>③日本レクリエーション協会・リーダー講習</p> <p>④日本キャンプ協会・リーダー講習</p> <p>⑤河川財団・事例発表会</p> <p>(2)学校活動サポート(8h以上)</p> <p>①RAC加盟学校ほか提携校等の活動をサポートする</p>	RAC指導者 (もしくはRACリーダー受講者)	座学及びOJT(学校 関連1.5h)以上の実 践終了者は「自然体 験活動指導者」とし て登録
専修課程	1.5h	30h以上 (学校活動 2h以上)	<p>教育課程と水辺体験</p> <p>(1)教育課程とは</p> <p>(2)教科、総合的な学習の時間について</p> <p>(3)学校における自然体験プログラムづくり</p> <p>(4)学校の学習に体験活動を位置づける考え方</p> <p>(5)問題解決学習と体験活動</p> <p>(6)OJTによるスキルアップとその必要性について</p>	<p>(1)基礎課程等で習得した資格で指導的活動を行う</p> <p>①プロジェクトWET</p> <p>②プロジェクトWILD</p> <p>③レクリエーション</p> <p>④キャンプ</p> <p>(2)学校活動サポート(2h以上)</p> <p>①RAC加盟学校ほか提携校等の活動を指導的立場等でサポートする</p>	RAC指導者で、且つ「RAC 学校連携コーディネーター養 成講座」基礎課程修了者	—
応用課程	4.5h	(納得が いくまで何 度でも)	<p>水辺体験活動の提案</p> <p>(1)実務事例を元にしたワークショップ</p> <p>(2)学校と連携した水辺体験活動カリキュラムづくり</p> <p>(3)カリキュラムの指導計画案づくり</p>	<p>(1)実践</p> <p>・自ら作成したカリキュラムの実践を行う</p> <p>(2)評価</p> <p>・実践した活動をPDCAサイクルにより評価改善を行う</p>	RAC指導者で、且つ「RAC 学校連携コーディネーター養 成講座」専修課程修了者	—

※今年度当該原案をもとに、部会で試行的に講座を実施し、検討を重ねて新しい不可資格として位置づける。

第●章 – ● 養成講座 指導者マニュアル

R A C 水辺のエコロジー講習（案）

講座の目的

- (1) 水辺の自然や生態を理解する。
- (2) 水辺の活動における自然との付き合い方・考え方を身につける。

プログラムの目標

- (1) 生物捕獲や観察を通して生き物の特徴を見て取れるようになる。
- (2) 水辺現場の生物の特徴から多様な生息環境の重要性を理解する。
- (3) 自然への負荷の少ない活動の考え方を深める。

受講条件

- (1) 16歳以上
- (2) 水辺の体験活動や生物、自然環境に関心のある人
- (3) 1人の指導者あたり参加者10名程度

講座全体の留意点

- (1) 簡潔で分かりやすい講座を心がける。
- (2) 講座は次の点に重きをおく。
 - 受講者一人ひとりがタモ網による生物捕獲が出来、観察する事が出来る。
 - 生き物の「名前」にこだわらず、特徴から独自に名前を考えさせる。
 - 生物の外見的特徴からその生物の生活特徴を想像し、周辺環境と対比させて考える。
- (3) 比較的浅い場所で行うが、PFDの着用を徹底する。
- (4) 胴長を使用する際はバディを組ませる等バックアップ可能な態勢を敷く。
- (5) 流域的な視点にも目を向けさせる。

講座実施時間

3時間半 (半日)

実施項目

科 目		形 式	時 間
①オリエンテーション	○RAC関連資料の説明・自己紹介 ○講座の趣旨・スケジュール説明 ○キャンプネーム・アイスペイク ○参加のねらい及び自己紹介	講 義	30
②捕獲と観察	○捕獲に挑戦 ○技・コツの共有 ○技・コツを生かした捕獲 ○分類・観察の道具紹介と実践	実 習	90
③グループワーク (現場検証)	○観察する生物の選定と命名 ○特徴の確認(後に図鑑で確認) ○グループ毎に生活環境の予想 ○実態の発表とグループへの質疑応答 ○活動における留意点の洗い出し(RACリーダー)	実習・講義	60
④まとめ	○流域と活動場所の生物(マニュアル) ○全体のふりかえり	講 義	30
合 計			210 (単位:分)

サンプルスケジュール

講座時間数 3時間半

- 13:00 受付
- 13:30 オリエンテーション
- 14:00 捕獲と観察
- 15:30 グループワーク(現場検証)
- 16:30 補足
- 17:00 終了

①オリエンテーション	講義	30分
------------	----	-----

目標

- (1) 受講者それぞれのねらいを理解する。
- (2) 受講者の緊張を和らげる。
- (3) グループ訳を行う。

指導上の留意点

- (1) 一方的な説明に終わらないように、受講者の経験を引き出すなど、参加型で進める。
- (2) 参加者の生き物に対する得手・不得手を確認し、後の実習・グループワークに活かせる様把握する。
- (3) 本講座では生物の名前にこだわらない事を十分に伝える。

進め方の例

1. 導入

- ① 講座の趣旨を確認する。
- ② 講師の自己紹介とともにキャンプネームについても紹介する。
- ③ 受講者にキャンプネームをつけてもらう。
- ④ アイスブレイキングを行い、緊張を和らげる。
- ⑤ グループ分けを行う。

2. 展開

- ① 全受講者より「キャンプネーム」「参加のねらい」「好きな生き物・苦手な生き物」を発表。
- ② 「参加のねらい」「好きな生き物・苦手な生き物」についてホワイトボードに書き留める。
- ③ 「好きな生き物・苦手な生き物」を掘り下げ、触る事が出来ない方を確認する。
- ③ 今回の講習で可能な限り各参加者の「ねらい」を楽しく達成できるよう工夫する。

3. まとめ

- ① 水辺は様々な生き物の生活の場である事、今回はそこにお邪魔する事を理解して貰う。
- ② 安全に留意して行う事を共有する。

②捕獲と観察	実習	90分
--------	----	-----

目 標

- (1) タモ網による捕獲方法の習得。
- (2) 生き物の観察。

指導上の留意点

- (1) 浅い場所でも PFD の着用を徹底する。
- (2) つま先、脚の保護に注意を払う。
- (3) 胴長着用の際はバディを組む等のバックアップ可能な態勢を作っておく。
- (4) 生き物の特徴を理解し、環境を見ながら捕獲する様に参加者自身に考えさせる。
- (5) 意図を持った分類をする。

進め方の例

1. 導入

- ① 何も教えずに、自由に捕獲してみる。 <目安 20 分>

2. 展開

- ① 一度集まり、上手い方の技やコツを共有する。 <目安 20 分>
- ② 技やコツを共有した上で再挑戦してみる。 <目安 30 分>

3. まとめ

- ① 捕獲した生き物を分類し観察してみる。 <目安 20 分>
- ② 時間が余った場合は目標を決め、狙った生き物の捕獲に挑戦してみる。

③グループワーク	実習・講義	60分
----------	-------	-----

目 標

- (1) 生き物の特徴を捉えた観察をする。
- (2) 特徴から生活環境や生態を考える。
- (3) 現場の環境と生き物の生活環境を対比し生き物にとって大切な場所を見出す。
- (4) (RAC指導者は)活動時の自然環境に対する留意点を洗い出す。

指導上の留意点

- (1) 生物の特徴と現場を比較する。捕獲時の感覚も参考になる。
- (2) 生き物の名前にこだわらず、自分たちで命名する。
- (3) 水辺は生き物の生活・出産・子育ての場であり、我々はそのにお邪魔している事を参加者に理解して貰う。(食べる食べられる関係の生き物、卵持ち、稚魚などが出たらチャンス。⇒「水辺と生き物の生活マニュアル」参照)
- (4) 必ずしも生物種の同定を詳細に特定できなくても良い。それよりも、生物の特徴から、その生物や生活環境を想像し考えていく事が重要。

進め方の例

1. 導入

- ① グループで1～3種の生き物の特徴を見出し、命名する。

2. 展開

- ① 特徴からその生物の生活環境や生活様式、技などを考える。
- ② 図鑑による確認。
- ③ 今回の現場で重要な環境や不足している環境の発表。発表グループに対する質疑応答。

3. まとめ

- ① 現場にある重要な場所を確認。(発表全体のまとめと「水辺と生き物の生活マニュアル」)
- ② (RAC指導者は)活動時の自然環境に対する留意点を洗い出す。(活動による環境インパクト軽減について)

④まとめ	講 義	30分
------	-----	-----

目 標

- (1) 様々な環境・生物の生活史から流域全体の重要性を考える。
- (2) 感じたことの共有。

指導上の留意点

- (1) 生き物はこの場所だけでは生きていけない事を考える。(例：アユ、ウナギ、エビ・カニ、カエル、トンボ) ⇒「生物と環境の繋がりマニュアル」参照
- (2) 生き物の場所である水辺にお邪魔しました。
- (3) RACの各種講座について紹介する。

進め方の例

1. まとめ

- ① 現場環境が断絶（孤立）した場合に困る生き物を出して貰う。
⇒「生物と環境の繋がりマニュアル」参照
- ② 講座全体をふりかえる。
 - 参加の狙いが達成できたかなど受講者とキャッチボールをしながらふりかえる。
- ③ RACの今後の活動内容や、主催団体の活動内容・予定などを紹介し、この講座で経験したことを「今後も体験活動を通して確かなものにしていこう!」、と伝えて締めくくる。